

混合交通を観察する
DOCUMENT EYE series—231

一般道路を走行中のクルマの車間距離(車間時間)を観察する



ある日の午後、気になる実際の交通状況を観察しました。



車間時間が2秒未満のクルマ

Q1

1時間に観察したクルマの中で、前車との車間距離が詰まっていた※のは何%でしょうか?

※車間距離が詰まっていた＝本紙観察では前車との車間時間が2秒未満の状態

- 観察場所/東京都世田谷区新町二丁目付近(国道246号)
- 観察日/5月19日(火曜日)
- 天候/くもり
- 観察時間/15:00～16:00
- 観察者/4名

【観察の対象】

今回の観察では、先頭車両や単独走行のクルマ、混雑により低速走行となるクルマ等は計測から除外し観察した(※判断は観察者の見解による)。観察場所での交通の流れは50～60km/h程度だった。

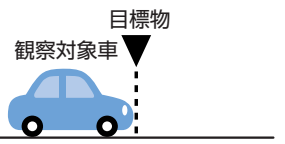
【車間時間の計測方法について】

観察するクルマの前車が目標物を通過した時(図1)から、観察するクルマが同じ目標物に差し掛かるまで(図2)の時間を車間時間としてストップウォッチで計測した。

図1:計測開始

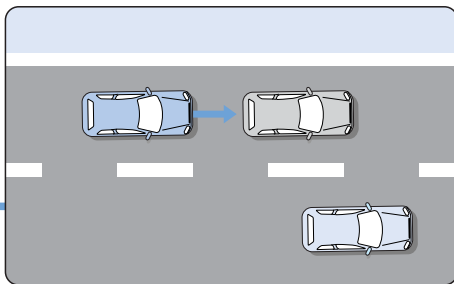


図2:計測終了



Q2

車間距離が短いクルマを目撃!!
何が危険だと考えられますか?

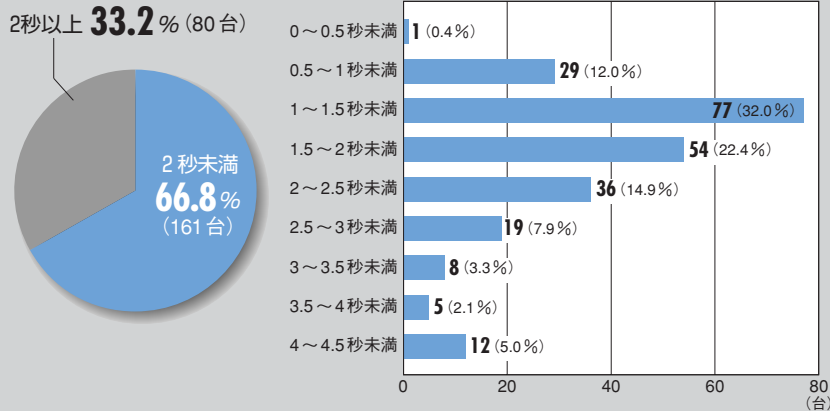


↓ 解答・解説

実際の観察から

Q1の解答: 約67%

●一般道路を走行中のクルマの車間時間(241台中)



- 1時間の観察で、車間時間を計測したクルマは241台(乗用車141台、軽自動車35台、タクシー8台、トラック28台、バス1台、原付8台、自動二輪20台)。その内、車間時間を2秒以上空けていたのは、80台(33.2%)だった。
- 車間時間1～1.5秒未満のクルマが最も多かった。
- 乗用車の後方を走行する二輪車は、車間時間が短い傾向があった。
- 前車との車間時間を2秒以上空けているクルマは、車種に関係なく見られたが、トラックやタクシーは比較的多かった。
- 上り勾配のある場所では、大型トラックと後続車の車間時間が短くなる傾向が見られた。

★今回の観察では約67%のクルマが車間時間2秒未満であった。前車と十分な車間距離をとらずに走行しているクルマは多いといえるだろう。車間距離をとることは追突事故の防止にもつながるので、ドライバーやライダーは車間距離を意識しながら運転してほしい。



上り坂では大型トラックに後続車が接近する

二輪車は前車との距離が近い傾向が見られた

Q2の解答:

前車の急ブレーキなどに対応しきれず、追突の危険がある。
危険を回避できるよう、前車と最低2秒以上の車間を空けることが大切

【解説】

ドライバーが危険を認知してから、ブレーキを踏もうと判断し実際に踏み込むまでの時間(反応時間)は、個人差はあるが1秒程度はかかり、その間にもクルマは進む(空走距離)が、さらに、ブレーキがきき始めてから停止するまでの距離(制動距離)もかかる。「空走距離」と「制動距離」を合わせた「停止距離」を考えて、危険が発生した場合でも安全に停止できるよう前車との十分な車間距離が必要だ。一般道路では距離の把握が難しいため、車間時間2秒以上を意識することが大切である。



車間時間が2秒以上のタクシー

ここがポイント

●車間時間2秒以上を目安に走行する

埼玉県警察本部は「0102運動(車間距離2秒以上)」を提唱している。前車が通過した地点に自車が差しかかるまでに、ゆっくり「ゼロ・イチ・ゼロ・ニ」とカウントし、約2秒の車間を保つ。

●運転に集中する

脇見運転をすると反応時間がさらにかかり、空走距離が長くなるので、運転に集中する必要がある。また、疲れているときには運転を控える。

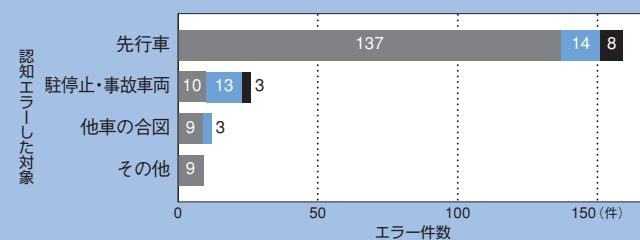
●速度を控える

速度が速くなると、停止距離も伸びる。道路状況に合わせて、安全に停止できる速度で運転することが大切。(乾いた舗装路面での停止距離の目安: 50km/hの場合32m、60km/hの場合44m)

ワンポイントDATA

追突したドライバーは、直前で前を見ていない例が多い

●事故直前の認知エラー(2003年(財)交通事故総合分析センター資料)



＜認知エラーの要因＞

- ～見なかった 14
 - ～見えなかった 8
 - その他
- 「～見なかった」内訳
他のものに注意、脇見 89
眠気、飲酒、急病 39
ぼんやり 17
思い込み 11
考え事 7
急ぎ 2